

【氏名】西川 賢

【所属大学院】（助成決定時）

慶應義塾大学 法学研究科政治学専攻 後期博士課程

【研究題目】

『ニューディール期のアメリカ合衆国における民主党の変容：「権力過程」政党組織の実証分析』

【研究の目的】

本研究の目的は、ニューディール期のアメリカを対象として、「福祉国家の基盤としての権力過程」に関する実証的・理論的に高水準の研究成果をあげることにある。具体的には、(1) 一次史料の網羅的蒐集により、ニューディール期（1930年代）のアメリカにおける「権力過程」の実証的究明を通じて、アメリカにおける福祉国家を新たな角度から捉え直すことを目指す。(2) 次に、実証研究で得た知見を帰納的に一般化し、「アメリカにおける福祉国家の成立と発展」を「権力過程」の面から捉え、再解釈する。(3) 歴史の実証研究と理論研究とを架橋しうる独自のアメリカ政治研究のアプローチを開拓することにより、かつてに比して研究者の数が減少し、研究活力を失いつつある日本のアメリカ政治研究に新たな地平を切り開く。

【研究の内容・方法】

アメリカ合衆国の民主党は19世紀以来、伝統的に南部の白人農民層を地盤とする政党という色彩が強かったが、これは1930年代、いわゆるニューディール期において大きな転換点を迎えた。すなわち、労働者、黒人、小農、移民、失業者といった階層が同時期にニューディール政策を支持して一致して民主党に投票するようになり、民主党は広く低所得者層に訴えるリベラルな政党として再編を遂げた。わけでも、労働者層が民主党の忠実な支持層として取り込まれていったことは重要である。なぜなら、爾来、労組は「ニューディール連合」の一翼を担う存在として民主党の左傾化・社会民主主義化を促し、今日に至るまで民主党の中核的支持基盤に止まり続け、同党の性格を規定し続けたからである。しかし、既存研究においては、民主党の性格の変容と組織的变化との関連について、説得的説明が与えられていない。その理由は、既往の研究が政治過程を基本的に「政策過程」を中心に見ており、「権力過程」、すなわち「ある特定の政策が選挙での集票や利益誘導の手段としてナショナル・レベルとローカル・レベルの双方においてどのように利用され、それがどのように党組織の変容、そして民主党の左傾化・社会民主主義化に結びついたか」ということに関して、これを積極的に考察する視点を欠いていたからである。以上のような問題に対して、本研究では、(1) 未公開の一次史料を多数発掘・分析する手法により、(2) ニューディール期の「権力過程」を記述することによってニューディール政治史を再検討し、(3) 民主党の変容に関して新たな理解を得ることを目指す。具体的には、(a) 南北戦争後のペンシルヴェニア州（1860年代から1870年代）に確立した共和党一党支配体制と、それを維持するメカニズムを解明し、併せてそれが動揺（1910年代から1920年代）を経て

崩壊（1930年代中葉）へと至るプロセスの解明する。(b) 1930年代のペンシルヴェニア州において、衰退しつつあった「政党マシン」にかわって、新たな政治的主体が台頭しつつあった事実を追究する。(c) 民主党との関係を強めた労働勢力は民主党の中核的支持基盤としてその左傾化を促し、同党の社会民主主義的性格を規定していくことになった事実を追究する。

【結論・考察】

本研究はニューディール期の民主党に固有の「権力過程の存在」を実証することによって、それがニューディール期以降に民主党が権力を獲得する、あるいは民主党が権力の枠組みを維持するために政策を形成・執行するプロセスを根底から動機づけ支えるものであったことを解明した。ニューディール期における「権力過程」とは、このような形で（戦後の）ニューディール体制の安定にも大きく寄与したと考えられるのではないだろうか。やや大袈裟に言えば、アメリカにおいて福祉国家が形成されていく一つの有力な契機がここに形作られたとみることも可能である。